

バレエ DVD 鑑賞前後における態度・行動意図の変容—大学バレエクラスを対象として—

Change of attitude and behavioral intention in appreciation of a ballet video:  
a case of a university ballet class.

醍醐笑部<sup>1)</sup>, 木村和彦<sup>2)</sup>, 作野誠一<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup> 早稲田大学スポーツ科学研究科

<sup>2)</sup> 早稲田大学スポーツ科学学術院

Ebe Daigo<sup>1)</sup>, Kazuhiko Kimura<sup>2)</sup>, Seiichi Sakuno<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup> Graduate School of Sport Sciences, Waseda University

<sup>2)</sup> Faculty of Sport Sciences, Waseda University

キーワード: スポーツ鑑賞, 態度, 行動意図, 反復測定, 解説

Key words: sport appreciation, attitude, behavioral intention, repeated measures, commentary

### Abstract

To improve an audience's attitude and behavioral intention, both how and what to appreciate must be discussed. The purpose of this study was to comprehend whether appreciation of a dance with different commentary influences an audience's attitude and behavioral intention toward the relationship with dance.

The repetition measurement was used to examine differences between sports attitude and behavioral intention. A 3×2 experimental design was implemented: conditions of instruction (on movement and dancer, related to story and performed environment, and non-instruction) × different time (before and after appreciation). A *t*-test was used to analyze differences in the means of pre-post-tests and groups.

The results showed that the experimental group, which received commentary related to both movement and dancer, had higher scores than other groups. These results were directly connected to attitude toward watching ballet. Therefore, to improve an audience's continuous intention to watch a sport, this study suggested that the audience must be educated on how to appreciate it.

Similarly, the experimental group which received commentary on the story and performed environment had higher scores on behavior intention of playing than other groups. If the commentary only focuses on knowledge of ballet, then the results may have less influence on attitude and behavioral intention in dimension of playing. In the control group, subjects continuously showed their interest in an impressive scene.

Regarding the duration of experience, beginners showed effective differences after receiving commentary on the story and the performance itself while watching a ballet. For audiences with a long history of appreciating ballet, commentary on dancers' skills and backgrounds had an influence on the degree of interest and attitude toward participation. Appreciation with commentary enables these audience members to sympathize with dancers' experience and skills.

スポーツ科学研究, 12, 19-37, 2015年, 受付日:2014年9月7日, 受理日:2015年1月20日  
連絡先:醍醐笑部 〒202-0021 東京都西東京市東伏見 2-7-5, e-mail:ebbe@ruri.waseda.jp

## I. 緒言

「生涯スポーツ」という言葉が浸透した今日, 人々は「する」だけでなく「みる」「支える」「話す」といった多様な形で自らのスポーツライフスタイルを築いている.このような様々なスポーツライフスタイル

ルとのかかわりから生まれる楽しさ,つまり「行う楽しさ」だけでなく,「見る楽しさ」「支える楽しさ」「読む楽しさ」「知る楽しさ」が,今日的なスポーツの魅力と考えることもできる(小泉ら,2004).余暇開発センター(1998)の「スポーツライフ白書」において

は、スポーツとの関わりが「する」「観る」「見る」「読む」「支える」「話す」という6つのカテゴリーで捉えられ、笹川スポーツ財団(2014)の「スポーツ白書2014」では「スポーツ実施」「スポーツ観戦」「メディア視聴」「スポーツボランティア」の各参与形態についての具体的な実施状況と今後の希望について調査報告がなされている。しかし、かかる報告以外にそれらの参与形態を個々に取り上げ、関係性や影響について明らかにした研究はみられない。

従来の研究では、プログラム参加者や観戦者、ボランティア参加者といった参与形態別の集団を個別に対象としてきたが、個人の中ではこうした「する」「みる」「支える」が独立しているわけではない。なかでも中心的な参与形態と考えられる「する」「みる」については、「するスポーツ」が「みるスポーツ」(特にスタジアムなどでのスポーツ観戦)へとつながることは観戦者の過去の競技経験と観戦行動との関係から実証されているものの(佐野,2006;2008),その逆については先験的に述べられるにとどまっている(上原,2002;林ら,2003)。つまり、人々が素晴らしいものを見て「やってみよう」と思うような事象については、研究としてほとんど取り上げられてこなかったといえる。

スポーツをどのように見せるか、あるいはスポーツの見せ方に関する研究成果は、「するスポーツ」(参加者サービス)を扱う経営体にとっては、そのきっかけとして「みるスポーツ」の提供の仕方を提示するものとなり、一方「みるスポーツ」(観戦者サービス・メディアスポーツサービス)を扱う経営体にとっては、一時的なスポーツサービスにとどまらず、スポーツ観戦の市場はもちろんスポーツ参加の市場への拡大に一定の貢献をなすものとする。

周知のように、わが国の学校体育は上述のようなスポーツとの多様な関わり方を学ぶ機会として捉えられる。亀山(2010)は、「体育授業において『運動文化理解をどう位置づけるのか』『身体活動における自己有能感をどう育むか』『どのような運動経験を重ねていくのか』等が明日の身体文化・運動文化を生成し、生涯にわたって運動やスポーツに親しむ素養を身につけることにつながるのではないだろうか」(p.223)と述べ、生涯スポーツの担

い手を育てるしくみとしての学校体育の重要性を唱えている。同様に、小泉ら(2004)は生涯スポーツを見据えた体育を行ううえでは、「する」に限らない授業の在り方が重要な意味をもつことを指摘している。

みることを具体的な学習内容としているものの一つにダンス授業が挙げられる。ダンスの授業は「創る・踊る・観る」を3つの大きな学習内容としており、中村ら(2006)によると、特に創作ダンスの授業ではグループ活動による創作学習を中心として全習学習を確立している。ここで注意すべき点は、「観る」機会のほとんどが生徒同士の発表の場に限られていることである。生徒同士の発表は友人の意外な一面を発見し、観られる楽しさを感じることができるが、プロの舞踊家の作品をみる、一流の感性に触れるという意味において「みる」機会に恵まれているとは言えないだろう。小泉ら(2004)や亀山(2010)の指摘に基づき、学校体育が生涯スポーツの一部としてスポーツとの多様な関わり方を学ぶ機会であるとすると、生徒同士の発表会だけでない「みる」機会の創造は学校教育を終えた後のスポーツライフに繋がる貴重な機会と捉えることが出来る。今後は、体育科教育全体の流れとして「みる」側面を含めた多様な参与形態を考慮した指導が期待されていることから、「観る」ことを具体的な学習内容としているダンス授業において鑑賞の場を設定し、その方法や効果を明らかにすることは他のスポーツへの示唆に富むものとなるだろう。

よりよいスポーツへの態度や行動意図(効果)を持つようになるには、ただ試合を見せるだけでなく、「どのようにみせるか」「何をみせるか」といった「みせ方」(方法)が重要になるということは論を待たない。本研究では、大学保健体育授業の一つとして開講されているバレエ授業を対象とし、解説をつけたうえでDVD鑑賞を行う。解説内容に変化をつけ、どのような解説内容が、その後の態度・行動意図を高めるかについて明らかにする。

## II. 先行研究

### 1. 直接スポーツ参与(する)と間接スポーツ参与(みる)の関係

直接スポーツ参与は一次参与ともいわれ、スポーツの参与形態の中心である。スポーツをみることも、スポーツを支えることもすべてスポーツを直接する人が存在していることで生起する参与形態といえる。競技性の高いスポーツ活動において、競技者や指導者の技術向上、トレーニング支援のために視覚教材を活用する例は一般的である。一方、生涯スポーツとしてのスポーツ参与については、金崎ら(1982)を嚆矢として社会学あるいは社会心理学の視点からスポーツ参加の規定要因が明らかにされている。そこでは、スポーツ行動の予測変数として「スポーツとのかかわり」が取り上げられ、この中には「みるスポーツの好嫌」が含まれている。分析の結果、ほとんどの者は「スポーツをみるのが好き」であることが明らかにされており(金崎ら,1981)、スポーツ参与の規定要因として「みるス

ポーツ」がどのような説明力を持つかについては触れられていない。その後、プログラム参加要因では、「運動・スポーツ参加に対する価値志向」(山口,1989)、継続化要因については「スポーツについての意識の型」(徳永,1989)という要因が有意に作用すると報告されている。スポーツ観戦がこれらのスポーツへの意識や価値観に影響を与えることは十分予想されるが、直接的な影響については検討されていない。このようなスポーツ行動の予測モデルに関わる研究は、その後、スポーツライフスタイル研究、スポーツキャリア研究、スポーツコミットメント研究へ発展していった。スポーツとの関わり方の質や多様性には触れるものの、直接スポーツ参与以外の参与形態についてはほとんど言及されていない。

表 1. 直接参与形態の研究

著者(発行年)	従属変数	要因	結論
金崎ら(1981)	参与の規定要因	みるスポーツの好嫌	説明力を持たない
山口(1989)	プログラム参加の規定要因	運動スポーツ参加に対する価値志向	有意差が認められる
徳永(1989)	継続化要因	スポーツについての意識の型	有意差が認められる

他方、間接スポーツ参与は、直接スポーツ参与との関連を前提として研究がおこなわれてきた。そのため、例えば観戦者行動の研究においては、過去のスポーツ実施経験、同一種目のプレー経験などを属性のひとつとして検討している(池田ら,1984: 古屋,1986: 斎藤,1991: 藤善,1994: 上原,2002: 渡辺,2005)。佐野(2007)は、国際イベントの観戦者について調査を行い、同一種目のプレー経験とその他のスポーツ種目のプレー経験に

ついて、基本的属性とは独立した形で分析を行い、競技によってその割合は特徴付けられていることを明らかにしている。さらに、スポーツ観戦の形態が多様化してくると、テレビ視聴を対象とした研究もおこなわれるようになり、例えばプロ野球と高校野球の視聴者について野球経験の違いが充足状態に及ぼす影響(川口, 2004)などについても報告がみられるようになっている。

表 2 間接参与形態の研究 その1

著者(発行年)	従属変数	結論
池田ら(1984)	スポーツ消費行動の有無	観戦には学習、娯楽、応援、ドラマ、カタルシスといった心理適用因果関係していることを示し、この心理的要因は性別、同種目の経験、競技方法ルール理解度、イベントの性格によって異なる。
川口(1990)	視聴者の充足状態	
斉藤(1991)	観戦動機・観戦回数	
藤善(1994)	観戦動機	
木佐貴(1996)	ライブ観戦・TV観戦の観戦動機	観戦からサッカーを学んだり評価する傾向は男性に強い(するスポーツと見るスポーツを結び付ける)
佐野(2007)	満足度	競技会の観戦者は種目ごとに経験の割合に差がある

間接スポーツ参与の結果として、直接スポーツ

参与への影響を取り上げた研究も散見される。林

ら(2003)は,日本と韓国のW杯前後にサッカー実施への態度・意図・行動を測定し,態度・意図の向上を認めた.上原(2002)も同イベントについて高校生のサッカーへの関心とJリーグへの興味が高まると述べている.いずれの研究も「みるスポーツはするスポーツに影響する」と結論付けてはいるが,実際にサッカー実施率が向上したかについては確認できておらず,有効性を検討する必要があると述べている.さらに,この研究では観戦における見方(見せ方)を考慮していないことから,ただ見せるだけでは直接スポーツ参加への影響が弱

い可能性も考えられる.観戦者研究において質的な調査は少なく(肥後,2010),個人のなかで両参加形態がどのように結びついているのかについては言及されていない.佐野(2007)が,観戦回数といった量的分析では観戦者の実態を十分に把握できないと述べているように,今後は,スポーツ観戦の有無だけでなく,何を見たのか,どのように見たのか(環境),どのように見せられたのか(修辞)を含めて,スポーツ実施との関係を明らかにしていく必要があるだろう.

表 3 間接参加形態の研究 その2

著者(発行年)	従属変数	結論
上原(2002)	サッカーへの興味・関心, サッカーの話題	W杯後にサッカーに関する会話が 증가、関心が増加するものは女子に多かった。
林ら(2003)	サッカーへの態度、意図、行動	みるスポーツはするスポーツに影響を与える W杯後にサッカー実施意図と態度は上昇する

本研究で取り上げる舞踊についても,実践と鑑賞の視点から先行研究をまとめておきたい.有馬(2008)は,学生(大学・短期大学・高等専門学校・専修大学・大学院)が芸術鑑賞へと向かう規定要因について検討し,鑑賞対象のうち舞踊を含む項目は過去の文化系部活動経験の有無に有意に影響を受けることを明らかにしている.また,学校体育におけるダンスを題材とした研究では「する」「みる」という参加形態が「踊る」「見る(観る)(鑑賞)」という言葉によって扱われてきた.秦(1995)によると,創作ダンスにおける課題授業では,およそ1~2時間の学習単位内に「踊る・創る・見る」の要素をいずれもバランス良く取り入れていけるよう展開されていると述べている.ダンス教育のねらいのひとつとして「鑑賞力の向上」が

あげられているが,ダンスジャンルによってやや相違がある(中村ら,2003).多くの研究対象校では生徒同士の発表会といったみる機会を鑑賞経験としている.宮本(2005)は,スポーツのように記録や勝敗という非常に判りやすい評価の観点を持たないダンスについては,発表会を使って生徒自身にも評価の機会をつくりだすことができると述べている.しかし,同じくみるという行為であっても,生徒同士による評価の機会を作り出すことと,プロスポーツを観戦する,プロ選手の動きをみることは同義ではない.さらに,授業の一部を用い鑑賞や評価の場を設定したとしても,その経験が授業の後にどのように習慣化するのかについての検討は皆無である.

表 4 舞踊における両参加形態の関係

著者(発行年)	目的	結論
中村ら(2003)	ダンス教育の狙い	ジャンルによってダンス教育の狙いが異なる。鑑賞力の評価は創作ダンスにおいて高い値を示した
宮本(2005)	パフォーマンス評価の基準	自らが授業のなかで聞いた指導言語を意識的に取り組み、他者のダンスを鑑賞する時の視点になる
有馬(2008)	政策やマーケティング基礎資料	舞踊を含む項目は女性、都市部在住、文化系の課外活動の有る人ほど鑑賞経験を持つ

今日では,スポーツ参加者,スポーツ観戦者の

どちらも重要な研究対象となっているが, 早川

(1996)が「『する』、『みる』スポーツの分離論が横行している」と述べたように,未だ「する」「みる」両

面の結びつきについては明らかにすべき課題が残っている.

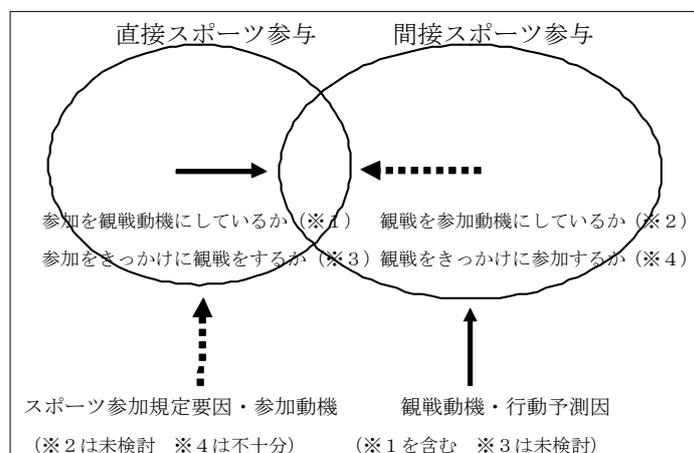


図1 直接スポーツ参与と間接スポーツ参与の関係

### III. 研究方法

#### 1.鑑賞ジャンルおよび調査対象の選定

本研究では映像教材としてクラシックバレエDVDを採用し,クラシックバレエを「バレエ」と表記する.公益法人日本バレエ協会HPによると「クラシックバレエのクラシックには『古典的な』という意味の他に『最高級の』という意味があるが,もっぱら19世紀末までに確立されたバレエ技法に忠実に踊られる踊りを指し,モダン・バレエやコンテンポラリー・ダンスとの対比を成す」とされている.本研究においてバレエを採用した理由(①~④)および大学バレエクラスを実践の場とした理由(⑤~⑥)を以下に示す.

- ① 平成24年度から完全施行された新学習指導要領において体育分野では「武道」と「ダンス」が中学校の男女に対し必修化となった.この指導要領の中ではダンスのジャンルを,創作ダンス,フォークダンス,現代的リズムのダンスの3つに分類しそれぞれの学習目標を定めている.クラシックバレエはここに明記された学習内容ではないものの,それぞれのダンスとの動きの共通点,及び歴史的関わりを考慮すれば,今後中学校においても鑑賞教材となり得る<sup>注1)</sup>と判断されること.
- ② 身体の形を表す言葉,技法についての用語定義が他のダンスジャンルに比べ統一されており,文字(テキスト)を通して共通理解を得る

ことに向いていること.

- ③ 古典作品と呼ばれるバレエ作品は芸術として確立されており「スポーツ鑑賞」を捉えようとする本研究の趣旨に適していること.
- ④ 実験的方法を用いた本研究の結果を用いて実際に応用する際,教材として誰にでも簡単に手に入る媒体であり,作品が多数存在していること.
- ⑤ 本研究は,大学の全学部の生徒が受講することのできる一般保健体育授業バレエクラスにて行った.これは研究枠組みの中に感想文の記述や解説の理解といった作業を必要としており,その際の言語能力や文章力に大きな差異があることは望ましくないこと,比較分析を行うにあたり対象者の年齢が幅広いことは好ましい状況ではないことを考慮し,ひとつの大学のおおよそ同年代(20歳前後)を対象とした.
- ⑥ 生涯スポーツを見据え,学校教育以降のバレエとの関わりに繋がることを期待し,中高校生ではなく大学生への調査を行った.

#### 2.調査手順

みるスポーツの効果を測る手法として,スポーツをみた前後に同一人物の変化を分析した研究は皆無である.さらに,スポーツ観戦者に関する先行研究の中で,みる媒体(DVD等)の内容,試合の

詳細,解説についても触れられているものもほとんどみられない。したがって,本研究では調査手順として,以下のような2つのステップを設定した。

(1) 予備調査

本調査において採用する方法を確認・決定するための予備調査である。ここでは,まず調査の対象者となる大学生に,介入方法として口頭による「解説」が有効であるかを確認する。さらに,先行研究(林,2004)において採用された「態度・行動意図」の6項目について,修正・改善すべき箇所を確認する。

(2) 本調査

口頭で伝える解説内容によって鑑賞における視点の操作を行い,その結果態度や行動意図に変化があるのかを明らかにする。ここでは,対象者のバレエ・ダンス経験によって,鑑賞前後の態度・行動意図の変化に差がみられるかについても検討する。

3. 予備調査

(1) 調査概要

予備調査では,教師による口頭の解説が,鑑賞者の態度・行動意図へ影響を与えることを確認することを目的とする。

調査日: 2010年4月7日

対象者: W大学オープン教育科目「バレエ基礎」授業 受講生

回収数: 計107名(有効回答率100%)

調査方法: 質問紙調査

バレエ作品(DVD): 「パリオペラ座バレエ『ラ・シルフィード』」<sup>注2)</sup>(コロンビアマニュージックエンタテインメント)

(2) 調査項目

調査項目の作成にあたっては,まずスポーツ観戦をきっかけとした態度・行動意図の変容に関する先行研究を参考にした。上原(2002)は高校生に対し,サッカーワールドカップがもたらした影響について検討しているが,ここでは,「態度」の変数として,「するスポーツ・みるスポーツどちらが好きか」「Jリーグへの関心は増えたか」を用いている。また,「意図」は,「今後スポーツ競技番組を見たいか」「Jリーグを観に行きたいか」,「行動」は,「スポーツ競技番組をみているか」「ワールドカップをどこで観戦したか」「友人・家族とのサッカーの話題が増えたか」という項目で捉えている。その結果,「みる」スポーツは生活の中にスポーツの楽しみとして取り入れられることが増え,さらに「する」スポーツとしてのトップスポーツを支える力になる可能性も有していることが明らかとなった。林ら(2004)は,「みる」スポーツが「する」スポーツに及ぼす影響に関して,ワールドカップ観戦とサッカー行動に着目し,態度,意図,行動という行動予測モデルを用い検討するとともに,その影響の違いについて日本と韓国で比較分析を行っている。ここでは「態度」について,「ワールドカップ大会前後,サッカーをすることに對してどのようなイメージ,考えを持っていましたか」という質問に対し,6項目(興味深い・有益・役に立つ・面白い・楽しい・積極的)を設定した。「行動意図」については,「あなたは,ワールドカップ前後,今年中にサッカーをしたいと思っていましたか」という質問に対しリッカート式尺度で測定している。

表5 態度・行動意図に関する研究

著者(発行年)	態度	行動意図
徳永ら(1989)	スポーツへの意識(快感情と不安感情)	一週間以内のスポーツ活動への行動意図
賀川ら(1990)	行動規範得点	
上原(2002)	サッカーの好き嫌い・Jリーグへの関心	スポーツ競技番組視聴に対する行動意図
林ら(2004)	有益・無益/つまらない・興味深い/役に立つ・役に立たない/面白い・面白くない/楽しい・楽しくない/積極的・消極的	サッカーをすることに對する行動意図

これらの先行研究をもとに,本研究では「態度」については林ら(2004)の6項目を採用した。使

用した項目は、「好き－嫌い」「興味深い－つまらない」「有益－無益」「役に立つ－役に立たない」「楽しい－楽しくない」「得意－苦手」「積極的－消極的」「身近－疎遠」である。それぞれについて7段階のSD法を用いた。さらに本研究では「行動」に至るまでを追うことが困難なため、「行動意図」を測定することとした。

### (3) 分析方法

本研究では、DVD鑑賞時に提示する解説内容により、対象者を3グループに分けた。各グループの人数および、解説内容は表6のとおりである。予

備調査における解説内容は武隈(1991)示された「プロダクトの便益構造」<sup>注3)</sup>を、バレエに応用する形で設定した。かかるのちに3グループの群間、さらにバレエ経験によって鑑賞前後の態度・行動意図にどのような差がみられるかを比較した。DVDをみた自由記述式の感想文は、意味を成すひとまとまりの文節ごとに区切り、その内容を解説内容として使用した「身体的特徴」「技術」「ストーリー」「衣装や舞台装置など」を基準として出現数を分析対象とした。対象者一人につき記述されているものはいくつでも分析の対象とした。

表6:解説内容

1群	34人	技術や、それを生み出す身体的特徴について
2群	38人	表現力や作品のストーリーについて
3群	35人	ダンサー、バレエ団、衣装、舞台美術について

### (4)結果

表7は対象者のこれまでのバレエ経験を示したものである。授業をきっかけに初めてバレエを行った人を「初心者」、過去にバレエを習っていたことがあり2年以上のブランクを経験したのち授業をきっかけに再開した人を「再開者」、授業以前にバレエを始めている人を「継続者」とした。継続者の中には、3歳～8歳に開始し現在まで続けているものと、大学入学時期に始めたものに分かれていたため、経験年数を3年以下のものを別途表記した。こうした経験による対象者の分類は、バレエが

幼少期の習い事として人気があることと関係している。同じ継続者であっても幼少期にバレエ教室でレッスンを受けた者と、大学入学後にダンススクールのオープンクラス等でレッスンを受けた者とはバレエそのものはもちろん、そこで得られる教師との関係、生徒間の関係、レッスン内容、環境が大きく異なると予想されるためである。全てのグループで初心者が40%台であった。表8は対象者のバレエ鑑賞経験の有無と鑑賞媒体について尋ねたものである。

表7:対象者のバレエ経験

	初心者	再開者	継続者 (3年以下)	継続者 (4年以上)	合計
1群	16(47.1)	13(38.2)	2(5.9)	3(8.8)	34(100.0)
2群	16(42.1)	16(42.1)	1(2.6)	4(10.5)	38(100.0)
3群	17(48.6)	10(28.6)	2(5.7)	7(20.0)	35(100.0)

各項目内の左は回答数, ()内は各群内における割合(%)

表 8:対象者のバレエ鑑賞経験

	直接舞台をみた ことがある	TVやDVDでのみみ たことがある	みたこと はない	無記入	合計
1群	23(67.6)	6(17.6)	5(14.7)	0	34(100.0)
2群	27(71.1)	7(18.4)	3(7.9)	1(2.6)	38(100.0)
3群	27(77.1)	8(22.9)	1(2.9)	0	35(100.0)

各項目内の左は回答数, ()内は各群内における割合(%)

各群におけるDVD鑑賞前後での態度・行動意図の平均値について  $t$  検定を行ったところ2群の対象者について態度2項目(「好き」「興味深い」),行動意図(「継続意図」)について有意な差がみられた(図2)。また,対象者のバレエ経験によって,初心者と経験者(再開者と継続者を合わせたもの)に分類しそれぞれ  $t$  検定を行

ったところ,態度1項目(「身近」と行動意図(「継続意図」)について初心者の方が有意に向上していた。「身近」については,2群の初心者において前後の変化が有意であるとされ「継続意図」については2群及び3群において有意差が認められた。

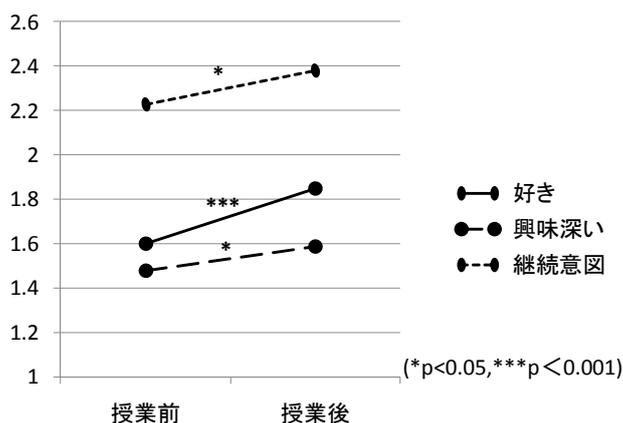


図 2:鑑賞前後における態度変化(2群の平均値)

表9は自由記述による感想文の内容を,解説内容として使用した「身体的特徴」「技術」「ストーリー」「衣装や舞台装置など」を基準として分類し,その出現数をまとめたものである。その結果,解説

内容と感想内容との間に関係性がみられる記述が多数確認された。このことから口頭の解説によって鑑賞者の意識や,注目箇所に影響を与える可能性が示唆された。

表 9:感想文の内容

	身体的特徴	技術	ストーリー	衣装など	その他	合計
1群	13	8	2	3	5	34
2群	3	2	23	3	1	38
3群	10	3	18	10	3	35

各項目内は回答数(複数回答あり)

(5)考察

以上の予備調査結果から,教員による口頭の解説を付けることで,鑑賞者の意識や注目する点に影響を与える可能性が示唆された.態度・行動意図についても解説内容によるグループ間の相違がみられ,その影響は初心者の場合により顕著であった.こうした映像や解説といった刺激が,初心者により強く影響する先行研究(井上ら,2004)を支持する結果であり,バレエのDVD鑑賞についても同様であることが示された.

また,予備調査では態度について形容詞対を尺度として用いたが,調査対象者からは,この尺度が「するバレエ」について聞いているのか,「みるバレエ」について聞いているのか不明確であると指摘があった.これをうけ,本調査では,態度尺度について若干の修正を施した.

4.本調査

(1) 調査概要

目的: 異なる解説によって DVD 視聴者の視点の操作を行い,その結果として態度や行動意図に変化が生ずるかを明らかにする.対象者のバレエ・ダンス経験によって,鑑賞前後の態度・行動意図の変化に差があるかについても考察する.

調査日時: 2010年9月29日

対象者: W 大学オープン教育科目 バレエクラス(応用)受講生

回収数: 65部(有効回答率 94.2%)

調査方法: 質問紙調査

バレエ作品:「Le Corsaire with American Ballet Theatre」<sup>注4)</sup>(ワーナー・ヴィジョン・ジャパン)

(2)調査項目

1. 基本属性

回答者の基本属性について,鑑賞前には性別,バレエ経験の有無と年数,その他ダンス経験の有無とその年数,クラシックバレエ鑑賞の有無とその内容,その他ダンスの鑑賞経験の有無とその内容,バレエ用語の知識,学校でのダンス体験の有無とその時期について回答を求めた.

2. 態度・行動意図の尺度

態度・行動意図尺度については,予備調査の結果をふまえて大幅に修正を行った.まず,「するバレエ」と「みるバレエ」を明確に分離させた.各質問文に「バレエを踊ること」や「バレエをみること」といった言葉を用い,参与形態を明確化した.その後,「好き」「楽しい」「興味深い」については,3項目が共通して好ましさを尋ねていることから「好感度」として統一し,「有益」「役に立つ」についても「有益度」として統一した.「積極的」「身近」「得意」については2項目を形容詞対ではなく文章として尋ねるように変更し「積極度」「身近度」「得意度」とした.質問文作成にあたっては,広告を見た後の態度について測定した飽戸(2006)を参考にした.行動意図である「継続意図」について変更点はない.

表 10:態度・行動意図の分類

		バレエを観ることについてどのように感じますか?	バレエを踊ることについてどのように感じますか?
態度	好感度	バレエを観ることが好きである	バレエを踊ることが好きである
		芸術として観ることに自体を楽しめる	動きそれ自体を楽しめる
		バレエを観ることに興味がある	バレエを踊ることに興味がある
	有益度	バレエを観ることは普通の生活に役に立つ	バレエを踊ることは普通の生活に役に立つ
		バレエを観ることでバレエに役立つ情報が得られる	バレエを踊ることでバレエに役立つ情報が得られる
	積極度	バレエを観ることを人に薦めたい	バレエを踊ることを人に薦めたい
		たくさんの作品を知りたい	たくさんの踊りを踊れるようになりたい
	身近度	バレエを観ることに親しみを感している	バレエを踊ることに親しみを感している
		バレエを観ることは幅広い層に受けそう	バレエを踊ることは幅広い層に受けそう
	得意度	バレエ作品に詳しい	バレエを踊ることが得意である
		バレエの特徴をよく理解できる	バレエの特徴をよく理解できる
	行動意図	継続意図	今後、バレエを観に行きたい

注目点の尺度

鑑賞後にどの程度普段と違った視点でバレエ DVD をみたかについて測定するため、解説内容の作成で用いたプロダクト構造の項目それぞれについて「どの程度注目するか(したか)」を 5 段階リッカート尺度で回答してもらった。

課題点を修正・改善し、最終的な調査票は表 11 のようになった。◆は予備調査の後に加えたものであり、★は担当教師が授業の指導にあたり必要な項目である。■は、予備調査の課題から内容に修正を加えたものである。

表 11: 本調査における調査票の内容

<p><b>【鑑賞前】</b></p> <p>★クラシックバレエについてのイメージ (自由記述)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・クラシックバレエの経験の有無と年数</li> <li>・舞台鑑賞の有無とその内容</li> </ul> <p>★バレエ用語の知識</p> <p>◆学校でのダンス体験の有無とその内容</p> <p>■バレエを踊ることへの態度</p> <p>■バレエを観ることへの態度</p> <p>バレエを踊ることへの行動意図(継続意図)</p> <p>◆バレエを観ることへの行動意図 (鑑賞意図)</p> <p><b>【鑑賞後】</b></p> <p>◆クラシックバレエのイメージ</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・DVD 鑑賞の中で最も印象に残っている事はなんですか? (自由記述)</li> </ul> <p>■バレエを踊ることへの態度</p> <p>■バレエを観ることへの態度</p> <p>バレエを踊ることへの行動意図(継続意図)</p> <p>◆バレエを観ることへの行動意図 (鑑賞意図)</p> <p>◆視点操作がされているか? (DVD 鑑賞で○○について良く理解できるものでしたか?)</p> <p>★この授業の受講理由 (自由記述)</p> <p>★授業への希望</p>
--

(3)分析方法

調査対象者を異なる解説を行う 3 つのグループに分け、各群ごとにバレエ DVD を鑑賞した。バレエ DVD のプロダクト構造(醍醐,2011)をもとに作成された解説内容は表 15 に示す「ダンサー・技術(1群)」「物語・舞台環境(2群)」「対照(3群)」の 3 通りである。ダンサー・技術群では、ダンサーの手足の動き、つま先の形、ダンサーの表現力や演技について、主人公の美しい動きや柔軟性について解説を行った。物語・舞台環境群では、他の群に話すあらすじよりもより詳しい物語の内容について触れ、舞台装置や衣装、マイムの意味につ

いて解説を行った。対照群とは、DVD 鑑賞にあたり解説者がシーンとシーンの繋ぎを理解するのに必要であると思われる最低限のあらすじ等の情報のみを与えた群である。各群における、注目点および態度・行動意図の変化は 5 段階リッカート型尺度を用い測定した。3 つの群の鑑賞前後の注目点および態度・行動意図の変化の比較は、反復測定を伴う二元配置分散分析(群<技術・ダンサー解説群,物語・環境解説群,統制群>×時間<鑑賞前後>)を用いた。それぞれの群の鑑賞前後の注目点および態度・行動意図の比較は、対応のある t 検定を用いた。

表 12: 解説内容

1	ダンサー・技術解説群	ダンサー(主人公、有名ダンサー)と技術(ジャンプ、回転、動き)について
2	物語・舞台環境解説群	物語性と環境(衣装、舞台装置)について
3	対照群	最低限の情報のみ

II. 結果

1. 基本属性

(1) バレエ経験

各群におけるバレエ経験の年数を比較したところ、群間に有意な差は見られずバレエ経験についてほぼ同質な対象者であることが分かった。

表 13: バレエ経験年数

解説群	0-2年	3-5年	6年以上	合計
1 ダンサー・技術解説群	6	2	13	21
2 物語・舞台環境解説群	7	2	13	22
3 対照群	7	1	14	22

単位 (人)     $\chi^2$ 検定値 (1.188)    自由度 (6)    有意確率 (p=0.977)

(2) 鑑賞経験

図3は対象者のバレエ鑑賞の有無について尋ねたものである。全ての群において約8割にあたる53名の対象者は直接舞台を鑑賞したことがあると回答した。さらに詳細な分析では、経験年数が6年以上になるとすべての対象者に鑑賞経験があると回答していることも明らかとなった。近年では、インターネットを通じて作品やコンクールの様子な

どを容易にみることができるため、鑑賞経験があると回答した生徒多いのではないかと予測されたが、テレビと異なり自ら検索する必要があることから行動に至らないケースもみられるようである。全く見たことがない人は技術・ダンサー解説群(1群)に1名、物語・舞台環境(2群)に3名、対照(3群)に1名であった。

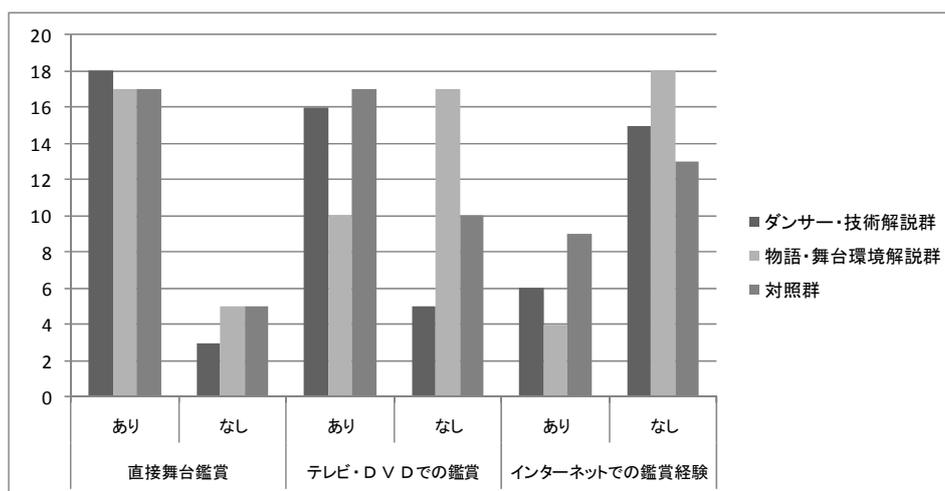


図 3: 対象者のバレエ鑑賞経験

(3) 学校でのダンス体験

体育のダンス以外で、何らかの形でダンスを体験する機会があったかどうかについて回答を求め

た。その結果、中学校・高校では半数以上の人がそうした機会があったと回答した。

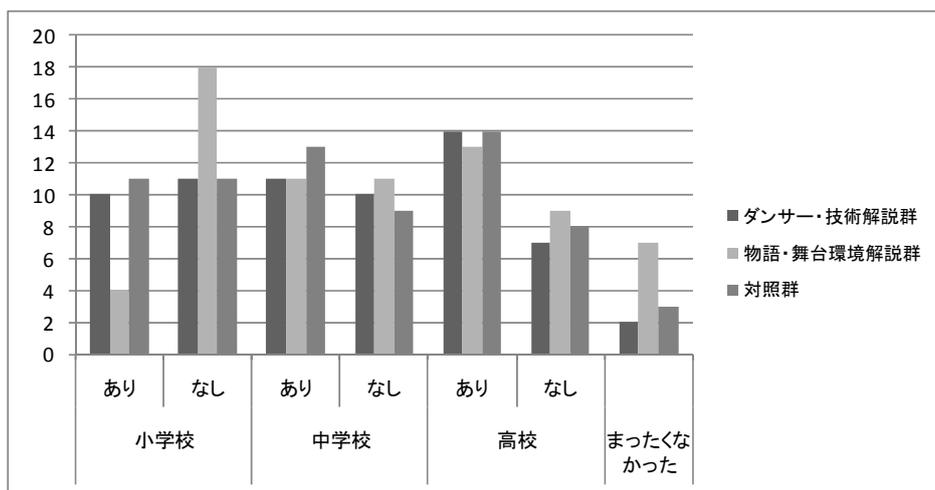


図 4: 学校でのダンス体験

(4) 学校でのダンス鑑賞の種類

ダンスに触れた機会のうち、「みる」機会としてどのようなものがあるのか回答を求めた。学校でのダ

ンス鑑賞の機会はそのほとんどが生徒同士の発表会であった。

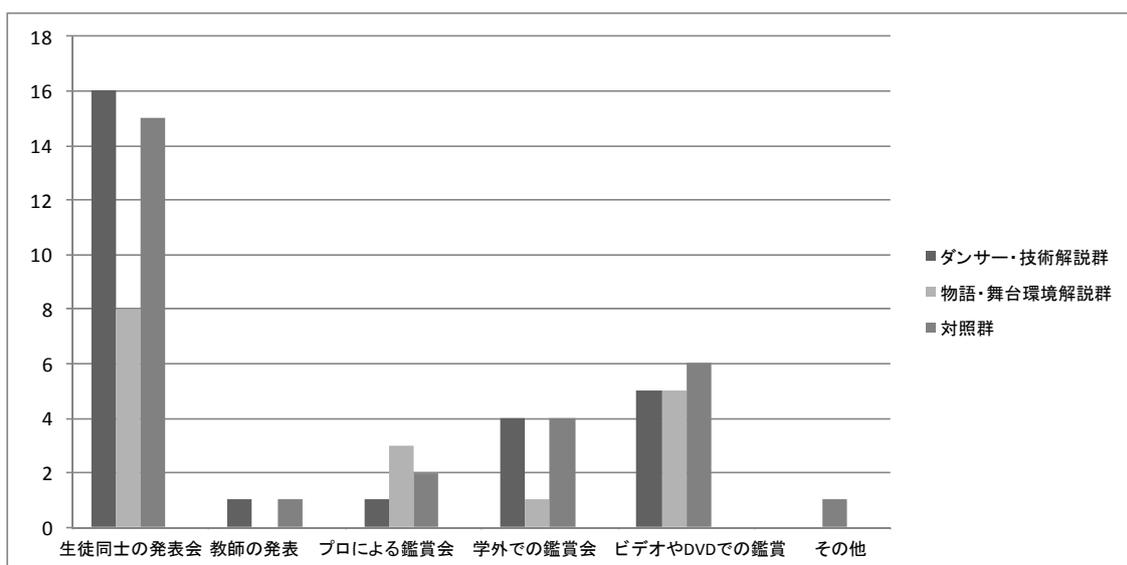


図 5: 学校でのダンス鑑賞の種類

2. 解説による注目点の変化

表 14 は、鑑賞前後における注目点の変化をまとめた表である。バレエDVDのプロダクト構成項目(醍醐, 2011) 27 項目について、鑑賞前後における平均値の差の検定を行ったところ、技術・ダンサー解説群では、「手足の動き」や「動きの軽さ」といった身体的特徴により注目している一方、「衣装」「舞台装置」について注目しなくなっていることが分かる。物語・環境解説群は「衣装」「舞台装置」「ダンサーの経歴」により注目していることから、こ

うした内容は解説がある場合は特に注目をするが、そうでない場合あまり注目されない内容であることが分かる。対照群では「回転の美しさ」「ジャンプの高さ」について有意差が認められた。これは今回採用されたバレエ作品に力強い男性の回転やジャンプのシーンがあったため、解説の少なかった群では映像から受ける影響や印象が相対的に大きくなったものと考えられる。このように、有意差が認められた項目については、解説の内容が反映されているように思われる。ここに記載されている項

目はすべて値の増減があったものの有意差は認められなかった。

表 14:注目点の変化

注目点	変化のあった群	
手足の動き	ダンサー・技術解説群	+
動きの軽さ	ダンサー・技術解説群	+
衣装	ダンサー・技術解説群	-
	物語・舞台環境解説群	+
舞台装置	ダンサー・技術解説群	-
	物語・舞台環境解説群	+
ダンサーの経歴	物語・舞台環境解説群	+
回転の美しさ	対照群	+
ジャンプの高さ	対照群	+

+:増加 -:減少

### 3. 態度・行動意図の変化

#### 1) DVD 鑑賞による態度・行動意図の変化

鑑賞前の「技術・ダンサー解説群」「物語・環境解説群」「統制群」の態度・行動意図は全ての群間で有意差が認められなかった。多変量分散分析の結果、態度尺度のうち「する好感度」「する積極度」「みる好感度」「みる積極度」「みる身近度」「みる得意度」について時間の主効果が認められた。さらに、行動意図として「する継続意図」「みる継続意図」についても有意差が認められた。

#### 2) 解説による態度・行動意図の変化

実験における 3 つの群は「技術・ダンサー解説群」「物語・環境解説群」という特定の解説内容に絞った「解説群」と、授業として成り立たせるための最小限の解説にとどめた「対照群」の 2 つにおいて分析を行った。しかし両群ともに時間・群間に有意な差は確認されなかった。このことは、対照群としたものの最小限の解説を併せていること、全く解説の無い群を設定することができなかつたことから教育現場においてこのような実験を行う限界とも考えられる。

#### 3) 解説内容による態度・行動意図の変化

DVD 鑑賞による変容が有意に認められた態度・行動意図について、解説内容の効果を調べたところ交互作用は認められず、解説内容の違

いが態度・行動意図に与える影響については明らかにすることができなかつた。(表 15)

#### 4) バレエ経験による対象者の分類と態度・行動意図の変化

ここでは調査対象者をバレエの経験年数によって分類した。経験年数 2 年以下の初心者 (n=20) と経験年数 10 年以上の長期継続者 (n=33) の変化を比較するため、それぞれ、鑑賞前・鑑賞後の平均点を算出し、反復測定を行った。それぞれについて、鑑賞前、鑑賞後の平均点を算出し、反復測定を行った。鑑賞前、鑑賞後それぞれの群間について一元配置分析を行ったが、有意な差は認められなかつた。したがって、鑑賞前後の比較分析を行った。まず、初心者の態度・行動意図の変化について分析した。「するバレエ」については物語・環境解説群のみ好感度に有意な差が認められた。「みるバレエ」における積極度は、物語・環境解説群の鑑賞前後に有意な差が認められ、物語や舞台上の環境について知識を与えることで積極的にみるようになったことが分かる。次に長期継続者の態度行動意図の変化についてである。こちらも、技術・ダンサー解説群および物語・環境解説群において「するバレエ」について有意な差が認められた。あらかじめバレエに関する知識のある継続者は特に新しい情報の得られない対照群で変化がみられなかつたことにも注目した

い。「みるバレエ」では、積極度、身近度に有意な差が認められた。特に身近度は全ての群で有意に

変化している(表 16)。

表 15:鑑賞前後における時間による効果と解説による効果

		有意確率							
		主効果 (時間)		交互作用 (時間×解説群)		主効果 (時間)		交互作用 (時間×解説の有無)	
する バレエ	態度	好感度	0.000 ***	0.445 n.s.	0.000 ***	0.239 n.s.			
		有益度	0.708 n.s.	0.967 n.s.	0.784 n.s.	0.784 n.s.			
		積極度	0.012 *	0.785 n.s.	0.010 *	0.564 n.s.			
		身近度	0.435 n.s.	0.139 n.s.	0.167 n.s.	0.053 n.s.			
		得意度	0.090 n.s.	0.265 n.s.	0.063 n.s.	0.374 n.s.			
	行動意図	継続意図	0.004 **	0.917 n.s.	0.009 ***	0.679 n.s.			
みる バレエ	態度	好感度	0.000 ***	0.454 n.s.	0.000 ***	0.207 n.s.			
		有益度	0.169 n.s.	0.912 n.s.	0.228 n.s.	0.752 n.s.			
		積極度	0.000 ***	0.805 n.s.	0.000 ***	0.744 n.s.			
		身近度	0.000 ***	0.915 n.s.	0.000 ***	0.679 n.s.			
		得意度	0.002 **	0.706 n.s.	0.005 **	0.497 n.s.			
	行動意図	継続意図	0.010 *	0.150 n.s.	0.004 **	0.151 n.s.			

n.s.:有意差なし, \*:p<0.05, \*\*:p<0.01, \*\*\*:p<0.001

表 16:バレエ経験による鑑賞前後の態度・行動意図の変化の比較

		1群	2群	3群
		ダンサー・技術解説群	物語・舞台環境解説群	対照群
全体	する	好感度(*) 継続意図(*)	好感度(*)	得意度(*) 継続意図(*)
	みる	好感度(*) 身近度(***) 積極度(*) 継続意図(*)	好感度(*) 身近度(***) 積極度(*)	好感度(*) 身近度(*) 積極度(*)
	初心者	する	なし	好感度(*)
長期継続者	みる	なし	積極度(*)	なし
	する	好感度(*)	好感度(*)	なし
	みる	積極度(*) 身近度(*)	身近度(*)	身近度(*)

\* p < .05, \*\* p < .01, \*\*\* p < .001

### III. 考察

DVD鑑賞による対象者全体の態度・行動意図において時間の効果がみられたものの、解説内容による差は認められなかった。有意差が認められなかった理由として、解説内容と態度・行動意図との関係性の把握が十分に行われていなかったことが考えられる。解説内容を決定する際に参考にしたのは、「バレエ DVD のプロダクト構造」(醍醐, 2011)であったが、これは観客が何をみているか、どこに注目しているかを尋ねたものである。ここでは解説によってその注目箇所を変えられることが予備調査及び本調査の注目点の変化結果によって証明されている。しかし、解説による交互作用が認められなかった点については、どこをみるか

が変わったからといって、必ずしもダンスに対する態度・行動意図の変化はつながらないことを示唆している。時間による変化はさまざまな態度・行動意図を変化させたことから授業の中で、教師という身近な存在が選んできたバレエ作品を見ることはそれだけで十分に興味深い行為であり、鑑賞前後における一定の効果を生んだと考えられる。今回は解説内容に対する生徒側からの質問や、自発的な問題提起、教師と生徒間のコミュニケーションは一切認めておらず、こうした情報を一方的に受け取るだけの状況では解説内容がどのようなものであったとしても、鑑賞者にとってはそのひとつひとつの内容にまで関心をもちにくいものとなってしまふと捉えることもできるだろう。

パフォーマンスの向上を目的とした映像を試合前に視聴し心理的側面の変化を測定した山崎ら(2009)らは、映像を実践場面でより効果的に活用するためには「自己選択」ということが重要な要素になると指摘している。山崎らの研究は「するスポーツ」を対象としているものの、本研究において解説内容や鑑賞作品について鑑賞者の選択余地が全くなかったことは同様の課題を残すものと思われる。今後は、自己選択的な情報の得かたや、コミュニケーションを交えた鑑賞の場の設定などを検討する必要があるであろう。

つまり、本研究において解説の有無や解説内容による違いを明らかにすることができなかったこと背景には、解説内容の設定ひいては鑑賞の場の設定における手続きが大きく関与している。金井(2001)は認知プロセスに関する研究において、映像認知には、大きく二つのプロセス、すなわち①映像を観る瞬間(本研究における鑑賞者の注目点)のプロセスと、②映像の認知をもとに理解(本研究における鑑賞内容の処理)するプロセスが存在すると述べている。また、これら二つのプロセスのどちらを重視するかによって、映像の修辞(本研究では解説)の持つ目的が変わってくることも述べている。このことから、本研究では映像をみる瞬間のみ作用するような解説であったと考えられる。さらに、本研究の態度尺度作成にあたって参考にした広告研究において最も有名な心理学モデルはいわゆる AIDMA<sup>注 5)</sup>と呼ばれるモデルである(桐谷ら, 2002)。このモデルを適用すれば、解説は主に「注意」に作用していたと思われる。現在は「注意」のあとに「理解」を入れる場合もあるが、いずれにしても解説が「記憶」や「行為」にまで影響を与えることはできなかったと考えられる。生涯スポーツへの繋がりを意識した本研究においては、一度きりの授業における鑑賞に留まらず、その後のバレエや周辺知識への興味関心がより重要となり、「理解」「記憶」「行為」についても考慮し今後の研究を進めていくべきであろう。

経験年数別の分析からは、初心者ではバレエ鑑賞の経験がバレエを行うことに対する好意的な態度を形成しておらず、このことは、初心者の鑑賞前後の態度・行動意図の項目において「するバレエ」への影響力が弱いという結果である。つまり、バレエ経験が無い、もしくは短いと「みるバレエ」から「するバレエ」へつなげて考えることが困難なのではないだろう。初心者にとってバレエ鑑賞はバレエを踊ることと独立しており、それ自体に楽しみを見出す。観客としての経験と踊る経験がどのように関係するのか初心者を追うことで明らかになるのではないだろうか。10年以上バレエ経験のある長期継続者では、「するバレエ」への好感度が「技術・ダンサー解説群(1群)」「物語・環境解説群(2群)」において上昇した。解説内容によって違いはみられなかったが、この結果は長期継続者が鑑賞にあたって解説の内容を自らの技術や身体に重ね合わせながら理解している可能性を示唆している。一定の期間(ここでは10年以上)バレエを踊っていることで、すでに「みる」「する」を結びつける思考が出来上がっている。

エ」への影響力が弱いという結果である。つまり、バレエ経験が無い、もしくは短いと「みるバレエ」から「するバレエ」へつなげて考えることが困難なのではないだろう。初心者にとってバレエ鑑賞はバレエを踊ることと独立しており、それ自体に楽しみを見出す。観客としての経験と踊る経験がどのように関係するのか初心者を追うことで明らかになるのではないだろうか。10年以上バレエ経験のある長期継続者では、「するバレエ」への好感度が「技術・ダンサー解説群(1群)」「物語・環境解説群(2群)」において上昇した。解説内容によって違いはみられなかったが、この結果は長期継続者が鑑賞にあたって解説の内容を自らの技術や身体に重ね合わせながら理解している可能性を示唆している。一定の期間(ここでは10年以上)バレエを踊っていることで、すでに「みる」「する」を結びつける思考が出来上がっている。

## V. まとめ

本研究では、生涯スポーツを見据え大学保健体育授業(バレエ)を題材とした「みるスポーツ」と「するスポーツ」の関係について検討した。

バレエ DVD を用いた本調査では、解説内容が異なる2つの群(「技術・ダンサー解説群」「物語・環境解説群」と、授業に必要な最低限の解説に留めた「対照群」)の、計3群について鑑賞前後の態度・行動意図の変化を分析した。その結果、解説を伴うDVD鑑賞によって鑑賞者の注目点は変化すること、そして対照群では印象的な映像場面に引きつけられていることが明らかになった。態度・行動意図については、鑑賞による「みるバレエ」への影響が「するバレエ」への影響に比べて大きかった。つまり、鑑賞はその後の「みる」ことに対する意識を変化させることはでき、「する」こととの関係性について一部ではあるが明らかにすることができた。しかし、解説内容の違いにまで及ぶ議論は本研究において述べる事が出来なかった。これまでのバレエ経験との関係では長期継続者に比べ初心者は「みるバレエ」と「するバレエ」の間に隔たりがあり、その影響を確認するに至らなかった。長期継続者の「みるバレエ」への好感度が増したことから、その隔たりを埋める一助としてバ

バレエ経験が役立っているとも考えられる。長期継続者は解説の中でも技術・ダンサー・身体といった内容を自らの経験に重ね合わせ、その後の態度・行動意図へ影響を与えていた。

本研究の結果は、いくつかの実践的インプリケーションを含んでいるが、そのひとつとして、学校体育において必修化されたダンス授業への応用があげられる。学校におけるダンス授業の特徴は、そのほとんどが初心者であることである。本研究の予備調査や先行研究から、初心者は解説の影響を受けやすいことが明らかにされた。また、解説を行う者が教師であればその影響力はきわめて大きいと予想される。本調査の結果から、初心者は物語性・舞台環境を解説した群において鑑賞前後の態度変化がみられた。舞踊の映像を鑑賞する上で、物語性を理解することは鑑賞対象である作品に一貫性を与えることができる。実際、本研究を行うにあたりどのバレエ作品を教材として使用するかについて何度も授業担当者と検討を重ねた。これは、授業は時間が決まっておき、ひとつの作品すべてを見せることは不可能である。さらに、初めて鑑賞するバレエが長く退屈な経験となることを避け、授業内で一貫性を持たせるためであった。作品の一貫性を感じることと物語の理解・授業の充実の関係は経験的にも無視できない要素である。また、舞台環境については知識量が増え、積極的な鑑賞態度に繋がっていくのではないかと。衣装や舞台装置といった環境は、言葉として捉えやすく、どこをみてよいか分からずぼんやり見してしまう鑑賞者に視点を定めどこをみるべきか指示してくれる役割を持つ。有名な作品であれば、物語性や舞台環境は専門家に聞く機会がなくとも資料をそろえることができる。しかし、偏った解説内容には負の影響があることも認識しておく必要がある。

対象者の基本的属性の結果をみると、現在「みる」ために行う授業は生徒同士の発表会がほとんどを占めていた。生徒同士の発表会では数あるダンスジャンルの限られた部分しか取り扱うことができず、そのジャンルについてもプロの作品を通じた技術やその作品の背景を知ることはできない。またいくつかの学校では、ビデオや DVD の鑑賞授業も行われていることが明らかになった。こうした映

像教材を用いる際に、どのような解説を併せ行うことが高い成果を生むのかということについてもさらに検討が必要と思われる。

次に、生涯スポーツとしての視点である。現在、子どもだけに限らず一般の観客、地域住民等に向け、スポーツをより楽しくみるための様々な講座やイベントが行われているが、本研究はそうした場にも一定の示唆を与えることが可能であろう。講座やイベントでは、スポーツ観戦に関する情報やその種目への理解が深まるような策がちりばめられている。本研究の結果からも、競技の歴史や選手のプロフィールなどをただ一方的に伝えるだけでは、観客の見方は変わるものの、好意的な態度や行動に結び付けていくことが難しいと予想される。そして残る問題はどのような内容と効果の測定によって講座やイベントを行えばよいかという点である。そしてその解決法は、理論的検討に基づき、実践し、改善する、を繰り返すほかない。

本研究の大きなテーマは「する」「みる」の関わり合いと、「みるスポーツ」についてただ試合をみせるだけでなく、「どのようにみせるか」「何をみせるか」といった「みせ方」を議論することであった。つまり、観客を扱う経営体や研究が観戦や鑑賞の場だけを効果の範疇と捉えていることへの批判的な検討でもあった。本研究ではバレエを題材としてこの問題にアプローチしたが、分析結果を他のスポーツ種目にも適用してみると、「みるスポーツ」が「するスポーツ」の好感度や継続意図に影響することが示唆されスポーツをみることが他の参与形態へも一部ではあるが影響を与えることが出来ると言える。本研究で用いた技術・ダンサー(選手)・物語性・舞台装置といった解説がただ試合を見るだけではない「みるスポーツ」経験を作り上げていることは確かであり、今後は観客(鑑賞者)との双方向的なコミュニケーションを採用するような講座やイベントなども視野に入れて、より詳細な検討を行っていくことが観客への情報提供、知識や興味関心の増大といった観点からも有用な知見となりえるだろう。

#### (注 1)

バレエは回転やジャンプ、つま先立ちなど高度

な技術を必要とする舞踊ジャンルである。しかし、バレエを踊るということは高度な技術の鍛錬だけではなく、物語を進めるためのマイムや舞台上の隊形移動など比較的簡単な動作を真似してみたり、新たに振付を創造し体験してみることも一つの方法である。またそうした実践がその後の鑑賞の理解を助けることもつながる。また、フォークダンスは各地域の地域性に基づいた踊りの特徴を味わうことが学習の中心であるが、バレエの中にも時代背景や地域性をもつ表現がありバレエ鑑賞を軸としつつも「踊る・創る・観る」を扱うことは十分可能であると考えた。しかし、本研究では大学生を対象としているため今後中学生を対象とする場合には更なる検討が必要である。

(注 2)

「ラ・シルフィード」や「ジゼル」は 19 世に前半に創られ、今も上演されているバレエの中で最も古い作品である(三浦,2009)。なかでも「ラ・シルフィード」は当時のロマン主義を全面的に反映しており、衣装はロマティックチュチュとよばれるひざ下までである真っ白のスカートが特徴である。現在バレエの衣装と言うと多くの方は「白鳥の湖」「ライモンダ」で用いられる、動きやすい短いチュチュ(クラシックチュチュ)を思い浮かべるだろう。ロマティックチュチュからクラシックチュチュへの変化はバレエの技法や歴史と大いに関係しており、本研究において用いるのに最適であると判断した。こうした「ラ・シルフィード」のもつ背景により、DVD の解説として衣装、歴史、技術を語る興味深い材料になった。

また、DVD すべてを授業時間内にみることが出来ないため、全体のあらすじを壊さないよう留意し鑑賞箇所を決定した。「結婚を控えた青年が、あるとき美しい妖精に魅せられ、追い求めた末に婚約者も妖精もすべてを失ってしまう」というあらすじを全てのグループに共通し映像開始時に説明した。鑑賞した箇所は、1 幕ではスコットランドの農村、ダンサーの登場シーンを流し、ここでは作品設定やダンサーの印象が捉えられる。2 幕のシルフィードの戯れる森では、クラシックチュチュ(衣装)やワールドバレエがみられる。そのほか、表現力の特に

表れるマイムや目を引くであろう回転やジャンプのシーンをどのグループにも差が出ないように一部を早送りし授業時間内に収めた。

(注 3)

武隈(1991)は「スポーツに関する運動者の便益構造」において便益の構造とスポーツ参加者のベネフィットセグメントの特性を図式化している。便益の構造は同心円状に拡大しており、3 つの層によって捉えられている。その中心は技能向上とスポーツの効用である。スポーツの効用はスポーツそれ自体の効用であり、スポーツによる効用とは別である。本研究ではスポーツそれ自体の効用である技術・試合・競争を、バレエそれ自体の効用として技術・表現・競争(選手・物語)として解説内容に反映させた。

(注 4)

日本でよく上演されるバレエは、チャイコフスキー 3 大バレエを始め、「ドン・キホーテ」・「ジゼル」、そしてこの「海賊」がよく観られる。その中で「海賊」は、日本でも 2008 年 3 月に熊川哲也率いる K バレエカンパニーの公演がテレビ番組として特集され(TBS「天才ダンサー熊川哲也ケガからの奇跡の復活」) 日本のバレエファンにはよく知られている。衣装についてもセクシーでエキゾチックな魅力があり、技術については「男性ダンサーの魅力すべてを發揮している」(三浦,2009)といわれるほど回転と跳躍の見せ場の多い作品である。日本では全幕公演されることは少ないが、それはすなわち部分的な鑑賞であっても十分楽しむことができることも捉えることができる。授業では、全体のあらすじが理解できるよう 1 幕 2 幕 3 幕に分け登場人物とその役割を解説した。エキゾチックな魅力は海賊ならではの躍動感と衣装、男性の美しい肉体から感じられると考え 2 幕のパドトロワ、パドドゥを見所の一つとした。

(注 5)

「アイドルとは企業のプロモーション活動で消費者がそのプロダクトを認知してから、実際に『購入する』までの過程を簡単にあらわしたもの」(久保

田,2011)である.頭文字はそれぞれ,消費者がその製品の存在を知り(Attention),興味をもち(Interest),欲しいと思うようになり(Desire),動機を求め(Motive),最終的に購買行動に至る(Action)という購買決定プロセスを経ることを意味している.

#### 引用・参考文献

- ・ 飽戸弘(1992)コミュニケーションの社会心理学. 筑摩書房
- ・ 飽戸弘(1999)売れ筋の法則.筑摩書房
- ・ 有馬昌宏(2008)学生の実演芸術の鑑賞行動を規定する要因についての基礎的分析.文化経済学会
- ・ 有馬昌宏(2002).文化経済学における実証研究の動向と課題.文化経済学 3(1):pp11-16 .
- ・ 石村貞夫(2011)SPSS による分散分析と多重比較の手順第4版.東京図書:pp112-139.
- ・ 井上史子・林徳治(2004)メディアを活用した児童・生徒の主体的学習態度の変容を図る授業の実証研究.教育情報研究 19(3): pp 3-14.
- ・ 上原信子(2002)見るスポーツが高校生に与える影響:ワールドカップがもたらしたもの」研究紀要/東京学芸大学附属高等学校 40: pp73-83.
- ・ 賀川昌明・石井源信・米川 直樹・岡沢 祥訓(1991)スポーツのゲームにおける行動規範の研究:小学校体育授業における態度変容の実験的試み.鳴門教育大学研究紀要 生活・健康編 6:pp21-37.
- ・ 亀山有希(2010)生涯スポーツ参加のための発展的課題の研究～大学スポーツに着目して～.名古屋女子大学紀要 56:pp223～236.
- ・ 金井明人・岩爪道昭・加藤雄一郎(2002)広告修辞認知のマルチエージェントモデル.人文科学とコンピュータ研究報告:pp25-32.
- ・ 神原直幸(2001)メディアスポーツの視点.学文社
- ・ 川辺光(1981)わが国一流競技者のスポーツへの社会化に関する研究:その1.直接スポーツ参与に影響をおよぼす社会的要因分析.東京外国語大学論集 31:149-173.
- ・ 川口晋一(1990)テレビのスポーツ中継視聴者の充足様態に関する研究.体育スポーツ社会学研究 9:pp79-99.
- ・ 川村洋次(2007)高校映像の技法・修辞と効果に関する研究.認知科学 14(3):pp409-423.
- ・ 川村洋次(2005)広告映像技法・修辞に対する視聴者反応の解釈的分析.商経学叢 52(2):pp271-285.
- ・ 小泉昌幸・伊藤巨志(2004)大学生のスポーツ行動の価値意識に関する一考察.新潟工科大学研究紀要 9:pp107-112.
- ・ 久保田正義(2011)コラーのスポーツマーケティング 3.0 に学ぶスポーツマーケティング入門.秀和システム:pp143
- ・ 笹川スポーツ財団(2006)スポーツ白書～スポーツの新たな価値と可能性～.
- ・ 笹川スポーツ財団(2014)スポーツ白書～スポーツの価値と可能性～
- ・ 佐伯聡夫(1999)スポーツ観戦論序説--問題の所在と観戦文化論の可能性(特集 スポーツ観戦論～スポーツをく見る・見る・観る)を考える～. 体育の科学 49(4):pp 268-273.
- ・ 佐野昌行(2006)国内スポーツリーグ・プレーオフの観戦者におけるリーグ観戦経験者と非経験者との比較ー日本ハンドボールリーグ.プレーオフの観戦者調査からー.日本体育大学紀要(36):pp25-53
- ・ 佐野昌行(2008)スポーツイベントの観戦動機とその要因に関する研究.日本体育大学紀要(37):pp83-95.
- ・ 杉本徹雄(1997)消費者理解のための心理学.福村出版株式会社.
- ・ 篠田邦彦(2001) スポーツの固有価値の享受能力に関する一考察ースポーツ鑑賞能力育成のための情意領域と経験領域ー.スポーツ教育学研究(20):pp141-146.
- ・ 篠田潤子(2007)スポーツとメディア.ブレーン社出版.
- ・ 武隈晃(1991)スポーツに関する運動者の便益構造ースポーツ事業への対応化を中心としてー.鹿児島大学教育学部研究紀要人文・社会

- 科学編 42:pp79-97
- ・ 高橋和子(2008)なぜ今ダンス必修化なのか. 体育科教育 2008(3):pp20-23
  - ・ 醍醐笑部・木村和彦(2011)「スポーツ鑑賞における解説内容の違いが態度・行動意図に与える影響—大学バレエクラスを題材に—」修士論文(未刊行)
  - ・ 田窪正則(2009)SPSS で学ぶ調査系データ解析. 東京図書株式会社.
  - ・ 徳永幹雄・金崎良三・多々納秀雄・橋本 公雄・菊 幸一(1989)スポーツ行動の継続化とその要因に関する研究(2): 大学生の場合. 健康科学 11:pp87-98.
  - ・ 時本識資(2004)「する」「みる」「ささえる」「知る」スポーツから. 体育科教育(52):pp34-37.
  - ・ 友添秀則(2004)スポーツの楽しさを保障する体育の授業づくりの意義—「行う」「見る」「支える」「知る」楽しさから—. 体育科教育(52)11:pp18-21
  - ・ 中村恭子・武井正子・浦井孝夫(2003)ダンス教育の目標に関する研究—高等学校のダンス教員の評価に基づいて—. 順天堂大学スポーツ科学研究 7:pp75-79.
  - ・ 中村恭子(2009)中学校の男女ダンス必修化の課題—中学校教員を対象とした調査にもとづいて—. 順天堂大学スポーツ科学研究 1(1):pp27-39.
  - ・ 橋本良明編著(1999)映像メディアの展開と社会心理学. 北樹出版.
  - ・ 秦, 恵美子(1995) 創作ダンスの学習指導 : 作品づくりへの試み. 高校教育研究 / 金沢大学教育学部附属高等学校 47:pp71-85
  - ・ 早川, 武彦(1996)スポーツ社会学研究の対象と方法—その基礎的作業—. 一橋大学スポーツ科学研究年報 pp3-8
  - ・ 林直也・原田 宗彦・Jo Lee Tea・Chon Tae Jun・Won Lee Chul(2004)W杯の観戦が日本と韓国における中学生のサッカー行動へ与える影響に関する研究 : 「みる」スポーツと「する」スポーツの関連に着目して. 大阪体育大学紀要 35:pp1-13
  - ・ 深澤弘樹(2010)スポーツ実況中継における「物語」—全国高校サッカー選手権決勝を例に—. 経営情報学論集 16:pp109-125.
  - ・ 松尾太加志・中村知靖(2002)誰も教えてくれなかった因子分析. 北大路書房.
  - ・ 三浦雅士(2009)バレエ名作ガイド. 新書館:p6
  - ・ 宮本乙女(2005)創作ダンス授業における学習者によるパフォーマンス評価の研究. お茶の水女子大学紀要 34:pp65-86
  - ・ 三尾忠男(1997)映像教材の構造記述カテゴリーの開発と映像情報の多重性の検討. 日本教育工学会論文誌 21(2):pp129-141
  - ・ 山崎将幸・杉山佳生(2009)バドミントン選手におけるモチベーションビデオの介入効果—試合—時間前視聴タイミングからの検討—. スポーツパフォーマンス研究 1: pp275-288